



Title	情報構造から見た大塚保安語の i
Author(s)	アルラ
Citation	北方言語研究, 13, 77-99
Issue Date	2023-03-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89072
Type	bulletin (article)
File Information	05_Arula.pdf



[Instructions for use](#)

情報構造から見た大墩保安語の ʂi

アルラ

(東京外国語大学大学院)

キーワード: 保安語 (モンゴル諸語)、記述言語学、情報構造

1. はじめに

本稿では、保安語積石山方言の下位方言の一つ大墩方言(以下、大墩保安語と略する)における漢語からの借用要素と見られる ʂi の統語的特徴と意味機能を情報構造の観点から論じる。

大墩保安語の先行研究である佐藤 (2011)は談話資料と民話に現れる ʂi に規則的に「是」とグロスを付け、「主題」として分析している。しかし、著者の調査の結果、 ʂi は「是」に置き換えられる場合が多いものの、中には漢語の「是」に置き換えられない場合もあることが明らかになった。また、先行研究において、 ʂi の意味機能における記述は一致しておらず、著者が国内外での調査を通して収集した保安語の口語資料を分析した結果、新たに分析を行う必要があることも明らかになった。

そこで本稿ではまず、大墩保安語における ʂi をめぐって、著者が収集した大墩保安語の資料と、先行研究として刊行された資料を基に、 ʂi の統語的特徴及び意味機能の分析を行う。そして、 ʂi が用いられる文の情報構造と、大墩保安語が本来持っていると考えられる、有標の語順の文の情報構造を対照することにより、それらの相違点を論じる。そして結論として、 ʂi が用いられる文において、 ʂi の前の要素は文の主題であり、後の要素は焦点であることを述べる。また ʂi による情報構造と有標の語順による情報構造の共通点として、文頭の要素は主題であることを主張し、相違点として、 ʂi が用いられる文の主題になる要素は主格形のみであるのに対し、有標の語順の文において主題になる要素は格の制限がないことを主張する。

本稿の構成は以下の通りである。2節では、保安語の概要を紹介する。3節では、 ʂi の先行研究と情報構造の一般的理論について述べる。4節では、 ʂi の統語的特徴について分析し記述する。5節では、情報構造の観点から ʂi の機能の分析を行う。6節では、 ʂi による情報構造と大墩保安語の固有の語順による情報構造を対照する。7節では、結論として ʂi の分析のまとめ、本研究の位置づけと今後の課題について述べる。

次に本稿で使用する資料について述べる。本稿ではすでに公刊されたテキスト資料のデータと、著者が2021年9月に中国・甘粛省積石山県大河家鎮で行った言語調査により採録したデータを用いる。

著者は、大墩保安語のテキスト集である佐藤 (2011)に現れる ʂi の用例をまとめ、それに基づき、文の翻訳、段落テキストの翻訳、自然談話採録などを通じ、大墩保安語の ʂi の機能及び意味についてインフォーマント調査を行った。著者の調査に協力してくださったインフォーマントは、1949年生、大墩村出身の馬瑞氏である。馬瑞氏は、保安語に加え、現地漢語方言、漢語普通話を話す。馬瑞氏は保安族の言語や民話等に豊富な知識を持っており、非

物質文化传承人という称号を得ている。馬瑞氏は大墩村出身であり、定年退職まで大墩村の小学校で教職に就いていたことから、彼が話す保安語は大墩方言と推定される。佐藤 (2011) の保安語のインフォーマントは、大墩村出身の 1928 年に生まれた馬福全氏である。著者と佐藤 (2011) の言語資料に方言差による相違は多くないように見える。しかし、 ʂi の使用状況について著者と佐藤 (2011) の言語資料の間にかかなりの相違がある。これはインフォーマントの世代差、保安語の著しい個人差などが原因であると考えられる。本稿に利用する先行研究によるデータは、布和ほか (1982)、陳乃雄 (1990)、佐藤 (2011) 等のテキスト資料を使用する。

本稿の例文のうち、出典の表示のないものは著者の調査によるものである。

2. 保安語の概要

保安語はモンゴル諸語に属する。保安語及び周辺のモンゴル諸語の東郷語、東部裕固語、土族語、康家語を総称し河湟語と呼ぶことがある。

保安語は、中国の保安族と一部の土族により話されている。保安語は話される地域によって、積石山方言と同仁方言という二つの方言に分けられる。

保安語積石山方言は、中国甘肅省臨夏回族自治州積石山保安族東郷族撒拉族自治州に居住する保安族により話されている。積石山方言は、村ごとの語彙形式、文法形式の使用の違いによって、さらに大墩方言、干河灘方言、高李方言、肖家方言、斜套方言などの下位方言に分けられる。保安語同仁方言は、中国青海省黄南藏族自治州同仁県に居住する土族により話されている。同仁方言は、それぞれ話されている村ごとに保安下庄方言、年都乎方言、郭么日方言、尕沙日方言などの下位方言に分けられる。

本稿で扱う大墩保安語の音素目録は、調査データから次の通りにまとめられる。短母音は a, e, ə, ø, o, i, y, u の 8 母音がある。二重母音は ai, əi, əu, ia, io, ou, ua, uə, ue, ui の 10 がある。子音は p, b, t, d, k, g, ɕ, f, v, s, ʂ, ɛ, ɣ, dz, tʂ, dʒ, te, dz, h, m, n, ŋ, r, j, l の 25 子音がある。著者の調査データでは、ndz, nd, ŋg, mb の四つの語頭子音連続が観察される。布和ほか (1982) によれば、大墩保安語の語頭子音連続は著者のデータの四つ以外に ndʒ, tɕ, ɣdz がある。佐藤 (2011) によれば、大墩保安語の語頭子音連続は著者のデータの四つ以外に fd, ɣdz がある。

3. 先行研究

本節では、まず保安語における ʂi に関する研究を紹介する。次に ʂi の意味機能を分析するにあたって用いる情報構造の理論及びコピュラに関する概念をまとめる。

3.1 保安語における ʂi の先行研究

3.1.1 布和ほか (1982)

布和ほか (1982:65) は、大墩保安語の ʂi について、「保安語の主語は漢語借用語「是」を付けることにより、さらに明確にされる。そして若者層によく観察される」と述べている。グロス布和ほか (1982) に基づいて一部を修正した。

- | | | | | | |
|-----|---------------|-----|----------|--------|-------------------|
| (1) | əɳə | ʂi | ɡuŋʂə-nə | teitʂə | o. (布和ほか 1982:65) |
| | これ | (是) | 公社 | 自動車 | 是 |
| | 「これは公社の自動車だ。」 | | | | |

- (2) *məs-dz(i) igu ʂi ted məsɡu o.* (布和ほか 1982:65)
 着る (是) (是) 藏族 服 是
 「着ているのは藏族の服だ。」

3.1.2 陳乃雄 (1990)

陳乃雄 (1990:22)は、干河灘保安語は漢語から「是」を借用し、「是」は「判断」の意味を表す、と述べている。グロス は 著者による。

- (3) *xabibu jitean ʂl defu, da ʂo.* (陳乃雄 1990:23)
 人名 以前 是 医者 今 COP.NEG.NEGO
 「xabibu は以前医者だったが、今は医者ではない。」

「判断」の意味を表す以外に、「仮定」または「～場合」という意味を表す場合もある (陳乃雄 1990:23)。グロス は 著者による。

- (4) *ʂo ʂl ʂɪgə, oloŋ ji-sɪ liwɪgə xuədzɛ bagə.* (陳乃雄 1990:23)
 少ない 是 四つ 多い COP-COND 六つ あるいは 八つ
 「少なかったら四つ、多かったら六つあるいは八つ。」

3.1.3 佐藤 (2000)

佐藤 (2000:65)は大塚保安語では「是 *shi*」は主題標識として借用され用いられているが、干河灘保安語では「是 *shi*」は若年層で連結詞として用いられている、と述べている。以下の(5a)は大塚保安語、(5b)は干河灘保安語の例である。グロス は 佐藤 (2000)による。

- (5) a. *habibu ʂi manbə wo.* (佐藤 2000:65)
 ハビブ 是 医者 です
 b. *habibu ʂi manbə.* (佐藤 2000:65)
 ハビブ 是 医者
 「ハビブは医者です。」

3.1.4 先行研究の問題点

先行研究について、以下のような問題点が指摘できる。

- ① *ʂi* の意味機能は先行研究によって異なっており、意味機能を改めて議論する必要がある。
- ② 保安語には語順により情報構造を表すことも可能であり、こちらは借用要素の *ʂi* に対し保安語に固有の情報構造を表す手段であると考えられるが、両者の違いを明らかにする必要がある。

3.2 情報構造について

本論文での議論のために、情報構造の理論的枠組み、およびいくつかの概念についてまとめておく。

Lambrecht (1994:5)によれば、情報構造とは、文文法の構成素であり、その中の事態の概念

的表象としての命題が、語彙文法構造と組み合わせられ、所与の談話文脈でこれらの構造を情報単位として使用及び解釈する発話参加者の心的状態と一致するという。

情報構造で扱う概念は、新情報と旧情報、焦点と背景、主題と評言等がある。

「旧情報」とは、発話時に話者が聞き手の心の中ですでに使用可能であると想定する文で誘起される「知識」の合計であり、「新情報」とは、発話自体によってその知識に追加される情報である (Lambrecht 1994:50)。

情報構造は言語によって形態的手段 (特殊な接辞等)、統語的手段 (語順の変化等)、音声的手段 (イントネーション等) で表される。本稿では、保安語の情報構造の形態的手段と統語的手段に注目する。

3.2.1 「焦点」

Lambrecht (1994:206)によると、文の焦点は、一般に、語用論的前提¹に重ねられるのではなく、追加される情報の要素と見なされる。主題が前提と同一ではなく前提に含まれるように、焦点は断言²と一致することなく断言の一部であるという。文の焦点、より正確に言えば、特定の発話文脈で文によって表される命題の焦点は、前提と断言が互いに異なる情報要素と見なされる。焦点となるのは、発言の時点では当然のこととは考えられない命題の部分である。これは、発話内の予測不可能な要素、または語用論的には回復不可能な要素である。焦点は、発話を断言するものである (Lambrecht 1994:207)。焦点とは、断言が前提と異なることによって語用論的に構造化された命題の意味論的構成素である (Lambrecht 1994:213)。

焦点構造は、文中の焦点範囲に基づき、述語焦点 (述語は焦点であり、主語は前提である)、項焦点 (前提とされた公開命題の空項を識別するもの)、文焦点 (主語と述語の両方に及ぶ事象報告または提示文) に分けられる (Lambrecht 1994:222)。

焦点と疑問文の相関性から、Fery and Ishihara (2014)によると、焦点の語用論的使用は、談話が発展する方向を調整する。まずは、いわゆる質問応答整合性である。WH-疑問文は整合性の応答文を必要とするため、現在のCG (Common Ground)に特定の種類の情報が追加される。言い換えれば、質問は「質問者のコミュニケーション上の目標を示すような方法で現在のCGを変更する」(Krifka 2008: 250)ものである。応答文は、CGに追加するために必要な情報を文の焦点として表現することで、このコミュニケーションの目標を満たす、と述べている (Fery and Ishihara 2014:6)。Lambrecht (1994:283)は、WH-表現が前提とされた開放命題の空項位置の可能なフィラーのセットを呼び起こすため、焦点ドメインとしての資格を持つ唯一の構成素は疑問詞 WH-(who)である。したがって、WH-疑問文は特定の項—焦点構造である、と述べている。

本稿では焦点を、談話の中で聞き手にとって新しく、聞き手によって補足できない要素である、と定義する。特に WH-疑問文では疑問詞が焦点となり、応答の文ではその回答になる部分が焦点となる。

¹ 「前提」とは、文が発せられた時点で聞き手がすでに知っているか、当然のことと考える準備ができていると話し手が仮定する、文中で語彙文法的に誘起される一連の命題である (Lambrecht 1994:52)。

² 「断言」とは、発せられた文を聞いた結果として、聞き手が知っている、または当然のことと考える文によって表される命題である (Lambrecht 1994:52)。

3.2.2 「主題」

主題の特徴について Lambrecht (1994:127)によると、「所与の談話」で命題が、ある指示対象「について」であるとみなされる場合、その指示対象は命題の主題として解釈される。即ち、この指示対象に関する受け手の知識に「関連」し、それを増やす情報を表現するものであるという。

主題と旧情報の関係について Erteschik-Shir (2007)によると、不定は「新しい」、つまり前の談話で言及されていないものでなければならない。定と代名詞は必然的に「既知の」または「古い」ものである。この特性は主題の定義に適しているという (Erteschik-Shir 2007:9)。これらの概念の拡張された意味で、主題は古いものまたは既知のものでなければならないと言える (Erteschik-Shir 2007:12)。

Nakagawa (2020)は、主題と焦点を相互に排他的に定義しており、主題、焦点と相関する指示対象の素性について以下のようにまとめている。主題と相関する指示対象の素性は、前提、定、有生、動作主、旧情報、推定可能であり、焦点と相関する指示対象の素性は、断言、不定、無生、受動者、新情報、推定不可能である (Nakagawa 2020:70)。

本稿では主題を、談話の中で、聞き手にすでに知られている要素である、と定義する。主題は話し手と聞き手に共有されている要素であり、談話はこの共有されている要素を中心に展開される。談話において、主題であるかどうかは、焦点によって判断する。つまり、文の焦点である要素は主題ではない、と考える。

3.3 「コピュラ」について

Pustet (2003:2)はコピュラの機能について、「主語と述語の間のリンカーの機能、動詞の屈折範疇を付加できる統語的「承接」の機能、それ自体では述語を形成しない語彙素に追加される述語の機能」と三つをあげている。本稿では、以上の三つの機能に注目して保安語の $\text{\textcircled{g}}$ i について論じる。

4. $\text{\textcircled{g}}$ i の統語的特徴

本節では、品詞と格の面から大塚保安語における $\text{\textcircled{g}}$ i の統語的特徴を検討する。

4.1 品詞による考察

まず $\text{\textcircled{g}}$ i の統語的特徴を品詞の面から分析する。大塚保安語の $\text{\textcircled{g}}$ i が用いられる文の述語は、「名詞+i/o」、「形容詞+ni/no」、「動詞（形動詞形）+ni/no」の三つの形になる。以下では名詞述語文、形容詞述語文と動詞述語文に分け、 $\text{\textcircled{g}}$ i の前に現れる要素と $\text{\textcircled{g}}$ i の後ろに現れる要素によって $\text{\textcircled{g}}$ i の出現環境を見る。

大塚保安語における $\text{\textcircled{g}}$ i の前に現れる要素は、名詞句、動詞の形動詞形の主格形に限られる。しかし、名詞句、動詞の形動詞形の主格形であるならば、その後ろに $\text{\textcircled{g}}$ i が必ず現れるということではなく、文の述部の形式によっては $\text{\textcircled{g}}$ i が現れない場合がある。佐藤 (2011)の分析³によると、「{形容詞/動詞の形動詞形} +ni/no」は名詞述語として機能していると考えられる。したがって、大塚保安語における $\text{\textcircled{g}}$ i が用いられる文の述語は名詞述語に限られる。

³ 佐藤 (2011)では、「-san-no」は「形動詞完了-名詞化・繫辞・客観」と分析されている。

大塚保安語の *ʂi* が現れる文をそれに対応する漢語と対照してみると、保安語に *ʂi* が現れる場合、それに対応する漢語にも「是」が現れるが、逆に漢語に「是」が現れる場合にそれに対応する保安語において必ずしも *ʂi* が現れるわけではない。

名詞述語文の場合、以下の(6)、(7)と(10)、(11)のように *ʂi* の前に名詞と動詞の形動詞形は出現可能であるが、(8)、(9)のように形容詞は出現不可能である。

① NP₁ *ʂi* NP₂+i/o (名詞主語、名詞述語)

(6) mənə narə ʂi husani i.
 1SG.GEN 名前 TOP 人名 COP.EGO
 「私の名前は Husani だ。」

(7) maŋgə ʂi boandzu o.
 1PL.INCL TOP 保安族 COP.NEGO
 「私たちは保安族だ。」

② *AdjP *ʂi* NP+i/o (形容詞主語、名詞述語)

(8) a. fulaŋ i-gu ʂi ndzaŋ-nə kuabao o.
 赤い COP.EGO-PTCP.NPST TOP 3SG-GEN カバン COP.NEGO
 「赤いのは、彼のカバンだ。」

b. *fulaŋ ʂi ndzaŋ-nə kuabao o.
 赤い TOP 3SG-GEN カバン COP.NEGO

(9) a. dzidzaŋ i-gu ʂi ŋgun-də-gu məsɣu o.
 厚い COP.EGO-PTCP.NPST TOP 冬-DATLOC-ADJ.DER 服 COP.NEGO
 「厚いのは、冬の服だ。」

b. *dzidzaŋ ʂi ŋgun-də-gu məsɣu o.
 厚い TOP 冬-DATLOC-ADJ.DER 服 COP.NEGO

③ V(PTCP)P *ʂi* NP+i/o (動詞主語、名詞述語)

(10) fulaŋ məs-dzigu ʂi mənə amo o.
 赤い 着る-PTCP.PROG TOP 1SG.GEN 母 COP.NEGO
 「赤い(服)を着ているのは私の母だ。」

(11) daŋsə kal-dzigu ʂi mənə adzi i.
 物語 話す-PTCP.PROG TOP 1SG.GEN 姉 COP.EGO
 「物語を話しているのは私の姉だ。」

形容詞述語文の場合、以下の(12)、(13)と(16)、(17)のように *ʂi* の前に名詞と動詞の形動詞形は出現可能であるが、(14)、(15)のように形容詞は出現不可能である。

① NP *ʒi* AdjP+ni/no (名詞主語、形容詞述語)

- (12) nə tɛə ʒi ɛinə no.
この 車 TOP 新しい COP.NMLZ.NEGO
「この車は新しい (ものだ)。」

- (13) nə dzalɣasɯŋ ʒi ɛinəen no.
この 魚 TOP 新鮮 COP.NMLZ.NEGO
「この魚は新鮮 (なもの) だ。」

② *AdjP *ʒi* AdjP+ni/no (形容詞主語、形容詞述語)

- (14) a. ɣənbə i-sə saŋ o.
優秀 COP.EGO-COND 良い COP.NEGO
「優秀であれば良い (優秀であることは良い)。」

- b. *ɣənbə (i-sə) ʒi saŋ o.
優秀 (COP.EGO-COND) TOP 良い COP.NEGO

- (15) a. dzəmə-nə duŋei ʒi saŋ no.
安い-GEN もの TOP 良い COP.NMLZ.NEGO
「安いのは良い (ものだ)。」

- b. *dzəmə(-nə) ʒi saŋ no.
安い(-GEN) TOP 良い COP.NMLZ.NEGO

③ V(PTCP)P *ʒi* AdjP+ni/no (動詞主語、形容詞述語)

- (16) ndzaŋ apə-saŋ ʒi saŋ no.
3SG 買う-PTCP.PST TOP 良い COP.NMLZ.NEGO
「彼が買ったのは良い (ものだ)。」

- (17) bu ndə-saŋ ʒi ɛinəen no.
1SG 食べる-PTCP.PST TOP 新鮮 COP.NMLZ.NEGO
「私が食べたのは新鮮 (なもの) だ。」

動詞述語文の場合、以下の(18)、(19)と(22)、(23)のように *ʒi* の前に名詞と動詞の形動詞形は出現可能であるが、(20)、(21)のように形容詞は出現不可能である。

① NP *ʒi* V(PTCP)P+ni/no⁴ (名詞主語、動詞述語)

- (18) nə ɣatei ʒi tei godzi kal-saŋ ni.
この 話 TOP 2SG 自分 言う-PTCP.PST COP.NMLZ.EGO
「この話は君自身が話したものだ。」

⁴ 「-V(PTCP)P+ni/no」は形動詞のテンス・アスペクトによって使い分けられる。例えば、過去時制の場合は、(18)のように-saŋ ni/no が用いられ、現在進行相の場合は、(20)のように-dzigu ni/no が用いられる。

- (19) nə məsɡu ʃi bu es-saŋ ni.
 この 服 TOP 1SG 作る-PTCP.PST COP.NMLZ.EGO
 「この服は私が作ったものだ。」

② *AdjP ʃi V(PTCP)P+ni/no (形容詞主語、動詞述語)

- (20) a. ndze-dzi saiɣaŋ i-gu ʃi bu apə-saŋ ni.
 見る-CVB 美しい COP.EGO-PTCP.NPST TOP 1SG 買う-PTCP.PST COP.NMLZ.EGO
 「見て美しいものは私が買ったものだ。」

- b. *ndze-dzi saiɣaŋ ʃi bu apə-saŋ ni.
 見る-CVB 美しい TOP 1SG 買う-PTCP.PST COP.NMLZ.EGO

- (21) a. ɡamo i-gu ʃi ndzaŋ idzi sagə-dzigu no.
 困難 COP.EGO-PTCP.NPST TOP 3SG ずっと 待つ-PTCP.PROG COP.NMLZ.NEGO
 「困難の(なこと)は彼がずっと待っていることだ。」

- b. *ɡamo ʃi ndzaŋ idzi sagə-dzigu no.
 困難 TOP 3SG ずっと 待つ-PTCP.PROG COP.NMLZ.NEGO

③ V(PTCP)P ʃi V(PTCP)P+ni/no (動詞主語、動詞述語)

- (22) tɛi ndə-dzigu ʃi bu apə-dzi rə-saŋ ni.
 2SG 食べる-PTCP.PROG TOP 1SG 買う-CVB 来る-PTCP.PST COP.NMLZ.EGO
 「君が食べているのは私が買ってきたものだ。」

- (23) bu ndze-dzigu ʃi loʃi putɛi-saŋ no.
 1SG 見る-PTCP.PROG TOP 先生 書く-PTCP.PST COP.NMLZ.NEGO
 「私が見ているのは先生の書いたものだ。」

動詞述語文の述部の動詞が形動詞形以外の場合、ʃi の前の要素が名詞句、動詞の形動詞形の主格形であっても、ʃi は用いられない。

④ *N/AdjP/V(PTCP)P ʃi V(IND/IMP/OPT)P (名詞/形容詞/動詞主語、動詞述語)

- (24) a. *nə ɡatei ʃi tɛi ɡodzi kal-o/dzo.
 この 話 TOP 2SG 自分 話す-IND.PST/ PRF.NEGO
 「この話は君自身が話した。」

- b. *aruŋ (i-gu) ʃi ndzaŋ algə-dzo.
 きれい (COP.EGO-PTCP.NPST) TOP 3SG 掃除する- PRF.NEGO
 「きれいなのは彼が掃除した。」

- c. *tɛi ndə-dzigu ʃi bu apə-dzi rə-o.
 2SG 食べる-PTCP.PROG TOP 1SG 買う-CVB 来る- IND.PST
 「君が食べているのは私が買ってきた。」

大塚保安語の ʃi の文における出現環境は表 1 のようにまとめられる。ʃi の前に現れる要

素は名詞句、動詞の形動詞形の主格形に限られる。ʒi が用いられる文の述語は名詞述語に限られる。しかし、以上の条件を満たす場合でも、ʒi が必ず義務的に用いられるわけではない。これについて次の 5 節で考察する。

表 1 大墩保安語の ʒi の統語的位置

前 \ 後	NP+i/o	AdjP+ni/no	V(PTCP)P+ni/no	V(IND/IMP/OPT)P
NP	○	○	○	×
AdjP	×	×	×	×
V(PTCP)P	○	○	○	×

4.2 格による考察

次に ʒi が現れる文の統語的特徴を格の面から考察する。ʒi は、名詞、動詞（形動詞形）の主格形（ゼロ格形）のみに後続し、他の格の名詞句に接続しない。

(25) **ndzaŋ ʒi daifu o.**

3SG TOP 医者 COP.NEGO

「彼は医者だ。」

(26) **nə məsɡu ʒi bu es-saŋ ni.** ((19)の再掲)

「この服は私が作ったものだ。」

(27) **ndzaŋ dulə-dzigu ʒi manə mindzu-nə wudao o.**

3SG 踊る-PTCP.PROG TOP 1PL.GEN 民族-GEN 舞踊 COP.NEGO

「彼女が踊っているのは私たちの民族の舞踊だ。」

ʒi は、名詞の属対格形(28b)、動詞（形動詞形）の属対格形(28c)、名詞の与位格形(29)、奪格形(30)、造-共同格形(31)に後続しない。直接目的語が文頭に置かれる場合には ʒi が後続することができるが、この場合属対格接尾辞をとることができない(28a)。与位格・奪格・造-共同格の接尾辞は一般的に省略できない。

(28) a. **nə gatei ʒi tei godzi kal-saŋ ni.** ((18)の再掲)

「この話は君自身が話したものだ。」

b. ***nə gatei-nə ʒi tei godzi kal-saŋ ni.**

この 話-ACC TOP 2SG 自分 話す-PTCT.PST COP.NMLZ.EGO

「この話は君自身が話したものだ。」

c. ***tei ndə-dzigu-nə ʒi bu apə-dzi rə-saŋ ni.** ((22)の再掲)

「君が食べているのは私が買ってきたものだ。」

(29) ***ndzaŋ-də ʒi bu ɡu ɡə okə-saŋ ni.**

彼-DATLOC TOP 1SG 本 TOP あげる-PTCT.PST COP.NMLZ.EGO

「彼に私が本をあげた。」

(30) ***bəidziŋ-sə ʒi ndzasi rə-saŋ no.**

北京-ABL TOP 3PL 来る-PTCP.PST COP.NMLZ.NEGO

「彼らは北京から来た。」

- (31) * manə gatei-galə ʂi kal-sə arpə o.
 IPL.GEN 言語-INS TOP 話す-COND 大麦 COP.NEGO
 「私たちの言葉で言えば arpə だ。」

5. ʂi の機能的特徴

4 節で述べた通り、大塚保安語の ʂi は名詞述語文に用いられる。著者の調査資料を見ると、大塚保安語の ʂi は同じ統語的環境で必ずしも義務的に用いられるわけではない。例えば、以下のような例がある。

- (32) a. nə harda o.
 これ 野ネズミ COP.NEGO
 「これは野ネズミだ。」
 b. maŋgə ʂi boandzu o. ((7)の再掲)
 「私たちは保安族だ。」
- (33) a. nə mortuŋ ŋga saŋ o.
 この 木材 とても 良い COP.NEGO
 「この木材はとても良い。」
 b. nə dianno ʂi dzui saŋ no.
 この パソコン TOP 最も 良い COP.NMLZ.NEGO
 「このパソコンは最もよいものだ。」
- (34) a. nə məsɡu-nə bu es-saŋ ni.
 この 服-ACC 1SG 作る-PTCP.PST COP.NMLZ.EGO
 「この服を私が作ったのだ。」
 b. nə məsɡu ʂi bu es-saŋ ni. ((19)の再掲)
 「この服は私が作ったものである。」

(32)~(34)の例文から見ると、(32b)、(33b)、(34b)には ʂi が用いられているが、それぞれと同じ構造にある(32a)、(33a)、(34a)には ʂi が用いられていない。このことから、文は ʂi の有無によって成否が変わるわけではなく、統語的観点では ʂi は文にとって必須要素ではないことがわかる。

保安語には固有のコピュラ i/o, mbi/mba, ei/eo⁵があり、名詞または形容詞に付加され述語になる。ʂi が用いられる文の述語は、「名詞+i/o」、「形容詞+ni/no」と「動詞(形動詞形)+ni/no」になる。ʂi は名詞または形容詞に付加される場合でも、述語を形成することができない。これは、3.3 節で述べた Pustet (2003)が提示したコピュラの「それ自体では述語を形成しない語彙素に追加される述語の機能」と合致していない。このことから、保安語の ʂi はコピュラとして機能しないと考えられる。

3.2.1 節で見た通り焦点と主題は一般的に相互に排他的である。先行研究において ʂi が主題標識であると議論されていることから、ʂi が用いられる文の容認性を情報構造の観点から

⁵ mbi/mba はその自体で回答になることができるが、i/o はできない。ei/eo は否定形である。

検討し、特に *ʃi* が用いられる文の焦点（項焦点）が *ʃi* の前の要素に置かれるか、*ʃi* の後の要素に置かれるかに注目する。

5.1 *ʃi* が用いられる文の焦点の位置

3.2 節で述べた通り、質問に対する応答の文では、疑問詞に対応する要素が焦点であると考えられる。ここでは疑問文とそれに対する応答文の例を検討する。

(35b)、(36b)文の *ʃi* の直後の要素がそれぞれ(35a)、(36a)文の疑問詞 *kaŋ* 「誰」に対応している。これにより、*ʃi* の直後の要素が焦点化されていると考えられる。それぞれ(35b)では主語の *ndzaŋ-nə dəu* 「彼の弟」、(36b)では主語の *tei godzi* 「君自身」が焦点化されている。

- (35) a. *aigə guragə-saŋ ʃi kaŋ i?*
 お碗 壊す-PTCP.PST TOP 誰 COPEGO
 「お碗を壊したのは誰か。」
- b. *aigə guragə-saŋ ʃi ndzaŋ-nə dəu o.*
 お碗 壊す-PTCP.PST TOP 3SG-GEN 弟 COP.NEGO
 「お碗を壊したのは彼の弟だ。」
- (36) a. *nə gatei-nə kaŋ kal-saŋ ni?*
 この 話-ACC 誰 話す-PTCP.PST COP.NMLZ.EGO
 「この話を誰が話したのか。」
- b. *nə gatei ʃi tei godzi kal-saŋ ni.* ((18)の再掲)
 「この話は君自身が話したものだ。」

(37b)、(38b)文の *ʃi* の直後の要素がそれぞれ(37a)、(38a)文の疑問詞 *jaŋ* 「何」に対応している。これにより、*ʃi* の直後の要素が焦点化されていると考えられる。それぞれ(37b)では目的語の *bu gudə apə-saŋ damo* 「私が昨日買った饅頭」、(38b)では目的語の *nəgə toli* 「一つのうさぎ」が焦点化されている。

- (37) a. *ndzaŋ ndə-dzi-gu ʃi jaŋ i?*
 3SG 食べる-PROG-PTCP.NPST TOP 何 COPEGO
 「彼が食べているのは何か。」
- b. *ndzaŋ ndə-dzi-gu ʃi bu gudə apə-saŋ damo i.*
 3SG 食べる-PROG-PTCP.NPST TOP 1SG 昨日 買う-PTCP.PST 饅頭 COPEGO
 「彼女が食べているのは私が昨日買った饅頭だ。」
- (38) a. *tei ndzatə-saŋ ʃi jaŋ o?*
 2SG 見かける-PTCP.PST TOP 何 COP.NEGO
 「君が見かけたのは何か。」
- b. *bu ndzatə-saŋ ʃi nəgə toli o.*
 1SG 見かける-PTCP.PST TOP 一つ うさぎ COP.NEGO
 「私が見かけたのはうさぎだ。」

(39b)、(40b)文の *ʃi* の直後の要素がそれぞれ(39a)の疑問詞 *kətei* 「いつ」、(40a)文の疑問詞

halə-sə「どこから」に対応している。これにより、*ʃi* の直後の要素が焦点化されていると考えられる。それぞれ(39b)では連用修飾語 *məχtei*「明日」、(40b)では連用修飾語の *bəidziŋ-sə*「北京から」が焦点化されている。

- (39) a. *ndzasi kətə ɣar-gu ʃi kətci i?*
 3PL 家 帰る-PTCP.NPST TOP いつ COPEGO
 「彼らが家に帰るのはいつか。」
- b. *ndzasi kətə ɣar-gu ʃi məχci i.*
 3PL 家 帰る-PTCP.NPST TOP 明日 COPEGO
 「彼らが家に帰るのは明日だ。」
- (40) a. *ndzasi halə-sə rə-saŋ no?*
 3PL どこ-ABL 来る-PTCP.PST COP.NMLZ.NEGO
 「彼らはどこから来たのか。」
- b. *ndzasi ʃi bəidziŋ-sə rə-saŋ no.*
 3PL TOP 北京-ABL 来る-PTCP.PST COP.NMLZ.NEGO
 「彼らは北京から来たのだ。」

(35b)～(40b)の文において、焦点になる要素はすべて *ʃi* の後ろに置かれることがわかる。以上の例文の焦点化される要素から、*ʃi* が用いられる文の焦点になる要素は主語、目的語、連用修飾語であると考えられる。

上記の疑問文とそれに対する応答文における考察により、焦点になる要素は全て *ʃi* の後ろに置かれていることがわかる。

5.2 *ʃi* の前に現れる要素の情報機能

5.1 節で見たことから、大塚保安語の疑問詞に対応する応答文における *ʃi* の後ろの要素は焦点であることがわかる。本節では大塚保安語の会話文、自然談話で用いられる *ʃi* 文を分析し、*ʃi* の前に現れる要素の情報機能を検討する。

Lambrecht (1994)の新情報・旧情報の定義に従うと、(41B)では *nə*「これ」が旧情報、*mənə ʃu*「私の本」が新情報である。(42B)では *nə* が旧情報、*mənə adzi-gə*「私の姉の」が新情報である。(43B)では *tə*「あの」が旧情報、*loʃi*「教師」が新情報である。また Lambrecht (1994)による主題の特徴から、上記の(B)文の *ʃi* の前の要素は主題として分析できる。

- (41) A: *nə jaŋ i?*
 これ 何 COPEGO
 「これは何か。」
- B: *nə ʃi mənə ʃu o.*
 これ TOP 1SG.GEN 本 COP.NEGO
 「これは私の本だ。」
- (42) A: *nə guʃi ʃu ʃi tɛin-gə mbu?*
 この 物語 本 TOP 2SG.GEN-POSS INTER
 「この物語の本は君のか。」

- B: *eo, nə ʃi mənə adzi-gə o.*
 COP.NEG これ TOP 1SG.GEN 姉-POSS COP.NEGO
 「いいえ、これは私の姉のだ。」
- (43) A: *tə kuŋ ʃi ɕueʃəŋ mbu?*
 あの 人 TOP 学生 INTER
 「あの人は学生か？」
- B: *eo, tə ʃi loʃi o.*
 COP.NEG.NEGO あれ TOP 教師 COP.NEGO
 「いいえ、彼女は教師だ。」

(44)の自然談話は、インフォーマントが「保安腰刀」について語った談話資料である。boan jodo「保安腰刀」は談話全体の主題であり、それに *ʃi* が後続している。

- (44) **boan jodo ʃi manə boan kuŋ-nə**
 保安 腰刀 TOP 1PL.INCL.GEN 保安 人-GEN
daŋmə-sə legə-saŋ le i-saŋ⁶.
 昔-ABL 作る-PTCP.PST 仕事 COP.EGO -PTCP.PST
boan jodo⁷ de es-gu teonə godzi-lə
 保安 腰刀 したばかり 作る-PTCP.NPST とき 自分-PL
dzar-gu-nə i-saŋ, le lagə səruf o.
 使う-PTCP.NPST-GEN COP.EGO -PTCP.PST 仕事 少し 粗い COP.NEGO
ɕuinə ibəi ibəi gorə-lə-nə nuli, manə boan
 後ろ 一世代 一世代 鉄匠-PL-GEN 努力 1PL.INCL.GEN 保安
jodo pindzuf oloŋ-də-dzi, dogoŋ amçai de va,
 腰刀 種類 多い-VBLZ-CVB さらに 鋭い も EXIST.NEGO
saiɕaŋ de va. manə boan jodo ʃi
 美しい も EXIST.NEGO 1PL.INCL.GEN 保安 腰刀 TOP
manə boan kuŋ-nə kətə dzar-gu de va,
 1PL.INCL.GEN 保安 人-GEN 家 使う-PTCP.NPST も EXIST.NEGO
ʃousaŋ-gu dzadzzi de va⁸.
 収集-PTCP.NPST 価値 も EXIST.NEGO

「保安腰刀は私たち保安人が昔から作ってきたものである。保安腰刀は作り始めたばかりの頃自分で使用するものであって、拵えが粗かった。後代の鉄匠の努力

⁶ 述部の「名詞+i/o」は過去を表す場合、*i-saŋ* が用いられる。例えば次のような文がある。laloŋ hoŋ ʃi bəs hoŋ isaŋ. (去年は虎の年でした)

⁷ (44)の自然談話において、二つ目の **boan jodo**「保安腰刀」に *ʃi* が後続していない。その理由について、従属節では *ʃi* が使われないという可能性が考えられる。ただし、今後引き続き検討を要する。

⁸ 本来想定している *i/o* 以外の存在動詞 *va* が現れている。4節の *ʃi* の統語的特徴において、「主語+述語/主語+目的語+述語」の作例によって考察したため、自然談話に現れるこの文は考察の範囲外になった。述部に現れる存在動詞の *va* については、議論を行うに足りる例文が得られていないため、検討は今後の課題とする。

で、私たちの保安腰刀の種類が多くなり、さらに鋭く、美しくなった。私たちの保安腰刀は私たち保安人の家に使用するものだけでなく、収集する価値もある。」

(45)はインフォーマントが上海に行ったことについての話である。*ʃi* の前の要素 *tər* 「あれ」は、直前の文に提起された *duŋfaŋmiŋdzu* 「東方明珠」を指す。

(45)	<i>bədə</i>	<i>lonen-lə-galə</i>	<i>təhoŋ</i>	<i>ʃaŋhai-də</i>	<i>dzi-dzo</i>	<i>ja.</i>
	1PL.EXCL	老年-PL-INS	その年	上海-DATLOC	行く-PRF.NEGO	INTJ
	<i>ʃaŋhai</i>	<i>fama-galə</i>	<i>ai-nə.</i>	<i>təŋgə</i>	<i>dzi-sə</i>	<i>bədə-galə</i>
	上海	巨大-INS	怖がる-IND.NPST	そのように	行く-COND	1PL.EXCL-COM
	<i>duŋfaŋmiŋdzu</i>	<i>gədzi</i>	<i>tə-də</i>	<i>nəgə</i>	<i>χari</i>	<i>dzi-dzo.……</i>
	東方明珠	という	それ-DATLOC	一	上がる	行く-PRF.NEGO
	<i>tər ʃi</i>	<i>da</i>	<i>bədə</i>	<i>ʃaŋhai-də</i>	<i>dzi-sə,</i>	<i>ndzatə-saŋ</i>
	あれ TOP	INTJ	1PL.EXCL	上海-DATLOC	行く-COND	見かける-PTCP.PST
	<i>dzui</i>	<i>fanmaŋ-nə</i>	<i>dzəndzu</i>	<i>i-saŋ.</i>		
	最も	繁華-GEN	建物	COP.EGO-PTCP.PST		

「その年、私たちは年寄りと上海に行った。上海はとても巨大である。そのように行ったとき、私たちは一緒に東方明珠に一回上がった。あれは私たちが上海に行ったとき見かけた一番繁華な建物だった。」

(46)の談話は、「積石山県」についての紹介である。*dziʃiʃan* 「積石山」が文の冒頭に現れ、談話全体の中心になる。その後に見える *dziʃiʃan* に *ʃi* が後続している。

(46)	<i>manə</i>	<i>dziʃiʃan</i>	<i>boandzu</i>	<i>duŋeianɟdzu</i>	<i>saladzu</i>				
	1PL.INCL.GEN	積石山	保安族	東郷族	撒拉族				
	<i>dzidzjeien</i>	<i>1981nien</i>	<i>təŋligə-saŋ</i>	<i>i-saŋ.</i>					
	自治県	1981年	成立-PTCP.PST	COP.EGO-PTCP.PST					
	<i>dziʃiʃan</i>	<i>ʃi</i>	<i>manə</i>	<i>gansu-də</i>	<i>dziaxaŋ</i>	<i>oloŋ</i>			
	積石山	TOP	1PL.INCL.GEN	甘肅省-DATLOC	唯一	多い			
	<i>mindzu</i>	<i>dzidzjeien</i>	<i>i-saŋ.</i>	<i>nəχaŋ</i>	<i>manə</i>	<i>boan</i>			
	民族	自治県	COP-PTCP.PST	ここ	1PL.INCL.GEN	保安			
	<i>kuŋ,</i>	<i>duŋeian</i>	<i>kuŋ,</i>	<i>zələr</i>	<i>kuŋ,</i>	<i>χuiχui</i>	<i>kuŋ,</i>	<i>ɛiru</i>	<i>kuŋ</i>
	人	東郷	人	撒拉	人	回族	人	土族	人
	<i>harvaŋ</i>	<i>mindzu</i>	<i>su-dzi-gu</i>	<i>oroŋ.</i>					
	10	民族	暮らす-PROG-PTCP.NPST	地域					
	<i>dziʃiʃan</i>	<i>ʃi</i>	<i>ʃidzie</i>	<i>mingə</i>	<i>χuar</i>	<i>χil-dzi-gu</i>			
	積石山	TOP	世界	民歌	‘花儿’	歌う-PROG-PTCP.NPST			
	<i>sər-dzi-gu</i>		<i>oroŋ</i>	<i>i-saŋ.</i>					
	学ぶ-PROG-PTCP.NPST		地域	COP.EGO-PTCP.PST					

「私たちの積石山保安族東郷族撒拉族自治县は1981年に成立した。積石山は(私たちの)甘肅省で唯一の多民族自治県である。ここは、保安人、東郷人、撒拉人、

回族、土族等の 10 の民族が暮らしている地域である。積石山は世界民歌‘花儿’を歌って、学んでいる地域である。」

以上の疑問詞に対応する応答文及び会話文から ʒi の前の要素は旧情報であることがわかる。(44)~(46)の自然談話では、直前の文に現れた要素が再び ʒi の前に現れていることが見て取れる。Lambrecht (1994)による主題の特徴から、 ʒi の前の要素は主題として機能すると考えられる。

6. 語順による情報構造との対照

5 節に示したように、保安語の ʒi の前の要素は主題であり、後ろの要素は焦点になる。本節では、 ʒi による情報構造と語順による情報構造を対照し、それらの共通点と相違点について検討する。

6.1 共通点

5.1.1 節で述べた通り、 ʒi の前の要素には焦点を置くことができない。それと比較し、語順によって焦点化される要素の統語的位置を考察する。

以下の(47)において、(47a)の疑問文に対する応答は(47b)と(47c)二つの文⁹が可能である。(47a)の疑問詞 kaŋ 「誰」に対応する(47b)と(47c)の tei godzi 「君自身」が焦点である。二つの文の異なるところは、(47b)文の焦点要素が ʒi の後ろに置かれるのに対して、(47c)文の焦点要素が目的語を文頭に移動する語順の変化によって表されていることである。二つの文の構造は異なるものの、焦点になる要素は文頭に置かれないことが見て取れる。したがって、 ʒi による情報構造と語順による情報構造の共通点として、焦点は文頭に置かれることができないといえる。

(47) a. $\text{nə gatei-nə kaŋ kal-saŋ ni?}$ ((36a)の再掲)

「この話を誰が話したのか。」

b. $\text{nə gatei ʒi tei godzi kal-saŋ ni.}$ ((18)の再掲)

「この話は君自身が話したのだ。」

c. $\text{nə gatei-nə tei godzi kal-saŋ ni.}$

この 話-ACC 2SG 自分 話す-PTCP.PST COP.NMLZ.EGO

「この話を君自身が話したのだ。」

語順による情報構造の文頭の要素は焦点ではなく、それが前の文にすでに現れたことがある旧情報である。Lambrecht (1994)による主題の特徴から、語順による情報構造の文頭の要素は文の主題であると考えられる。

ここで示された語順とは、有標の語順を指している(以下で述べる語順による情報構造も、有標の語順による情報構造を指す)。有標の語順において、文頭に置かれる要素は主題にな

⁹ 二つの文の違いについて、インフォーマントによれば、 ʒi の使用によって焦点化される要素が相手にさらに強く伝えられるという。

ることから、主題化の一つの手段は文頭に移動することであると考えられる。主題化された要素は焦点になりえないため、文頭に移動した要素は焦点になることができない。これに対して、無標の語順では、何も移動されておらず、また焦点になることができない要素がない。このことから、無標の語順では主題化された要素はなく、文頭の要素にも焦点を置くことが可能であると考えられる。

6.2 相違点

6.2.1 主題になる要素の格

4.2 節に述べた通り、保安語の *ʒi* の前に置かれる要素に格の制限があり、*ʒi* は名詞、動詞（形動詞形）の主格形（ゼロ格形）のみに後続する。本節では、有標の語順の文において主題になる要素の格から検討し、*ʒi* の用いられる文との違いについて考察する。

以下の(48a)の疑問文に対する応答は、(48b)と(48c)の二つの文が可能である。(48c)において属対格接尾辞-*nə* を省略しても文の意味に変化が生じないため、直接目的語 *nə məsɡu* が(48b)のように属対格も、(48c)のように主格も取ることが可能である。したがって、有標の語順の文において主題になる要素は主格も、属対格も取ることが可能である。

- (48) a. *nə məsɡu-nə kaŋ es-saŋ ni?*
 この 服-ACC 誰 作る-PTCP.PST COP.NMLZ.EGO
 「この服を誰が作ったのか。」
- b. *nə məsɡu-nə bu es-saŋ ni.* ((34a)の再掲)
 「この服を私が作ったのだ。」
- c. *nə məsɡu bu es-saŋ ni.*
 この 服 1SG 作る-PTCP.PST COP.NMLZ.EGO
 「この服、私が作ったのだ。」

(49b)の有標の語順の文において主題になる要素は与位格を取っている。

- (49) a. *ʃaŋhai-də kaŋ dzi-saŋ no?*
 上海-DATLOC 誰 行く-PTCP.PST COP.NMLZ.NEGO
 「上海に誰が行ったのか。」
- b. *ʃaŋhai-də bədə dzi-saŋ no.*
 上海-DATLOC 1PL.EXCL 行く-PTCP.PST COP.NMLZ.NEGO
 「上海に私たちが行ったのだ。」

(50b)の有標の語順の文において主題になる要素は奪格を取っている。

- (50) a. *bəidziŋ-sə kaŋ rə-saŋ no?*
 北京-ABL 誰 来る-PTCP.PST COP.NMLZ.NEGO
 「北京から誰が来たのか。」
- b. *bəidziŋ-sə ndzasi rə-saŋ no.*
 北京-ABL 3PL 来る-PTCP.PST COP.NMLZ.NEGO
 「北京から彼らが来たのだ。」

(51b)の有標の語順による情報構造の主題になる要素は造-共同格を取っている。

- (51) a. *nə teodzi-galə kaŋ məsɣu-nə es-saŋ no?*
 この シルク-INS 誰 服-ACC 作る-PTCP.PST COP.NMLZ.NEGO
 「このシルクで誰が服を作ったのか。」
- b. *nə teodzi-galə ndzaŋ məsɣu-nə es-saŋ no.*
 この シルク-INS 3SG 服-ACC 作る-PTCP.PST COP.NMLZ.NEGO
 「このシルクで彼が服を作ったのだ。」

以上、有標の語順の文において主題になる要素の格を検討すると、*ʒi* の用いられる文の主題になる要素とは異なることが分かる。保安語の *ʒi* の用いられる文の主題になる要素に格の制限があり、主格（ゼロ格）のみが可能なのに対して、有標の語順の文においては主題になる要素に格の制限がなく、主格、属対格、与位格、奪格と造-共同格のすべてが可能である。

6.2.2 焦点がおかれる要素の格

6.1 節で述べた通り、保安語の *ʒi* の用いられる文と有標の語順の文において焦点になる要素は共通して文頭に置かれない。本節では、二つの文構造における焦点になる要素の格を検討する。

(52a)の疑問文に対する応答は(52b)と(52c)の二つの文が可能であり、疑問詞 *kaŋ* 「誰」に対応する *tei godzi* 「君自身」は焦点化されていると考えられる。(52b)の *ʒi* の用いられる文と(52c)の有標の語順の文の焦点になる要素は主格形で現れている。

- (52) a. *nə gatei-nə kaŋ kal-dzo?*
 この 話-ACC 誰 話す-PRF.NEGO
 「この話を誰が話したか。」
- b. *nə gatei ʒi tei godzi kal-saŋ ni.* ((18)の再掲)
 「この話は君自身が話したのだ。」
- c. *nə gatei tei godzi kal-saŋ ni.*
 この 話 2SG 自分 話す-PTCP.PST COP.NMLZ.EGO
 「この話、君自身が話したのだ。」

(53a)の疑問文に対する応答は(53b)と(53c)の二つの文が可能である。(53b)文の *nə damə-nə* 「この壁を」が(53a)の疑問詞 *anəgə* 「どれ」に対応し焦点化されている。(53b)の *ʒi* の用いられる文の焦点になる要素は属対格形で現れている。(53c)は無標の語順である。

- (53) a. *tei anəgə damə-nə gaiɣə-saŋ no?*
 2SG どの 壁-ACC 塗る-PTCP.PST COP.NMLZ.NEGO
 「君はどの壁を塗ったのか」
- b. *bu ʒi nə damə-nə gaiɣə-saŋ no.*
 1SG TOP この 壁-ACC 塗る-PTCP.PST COP.NMLZ.NEGO
 「私はこの壁を塗ったのだ。」

- c. bu nə damə-nə gaigə-saŋ no
 1SG この 壁-ACC 塗る-PTCP.PST COP.NMLZ.NEGO
 「私はこの壁を塗ったのだ。」

(54a)の疑問文に対する応答は(54b)と(54c)の二つの文が可能である。(54b)文の *gudə*「昨日」が(54a)疑問詞 *kətɛi*「いつ」に対応し焦点化されている。(54b)の *ʂi* の用いられる文の焦点になる要素は主格形で現れている。(54c)は無標の語順である。

- (54) a. tɛi kətɛi pio-nə apə-saŋ ni?
 2SG いつ チケット-ACC 買う-PTCP.PST COP.NMLZ.EGO
 「君はいつチケットを買ったのか。」
- b. bu ʂi gudə pio-nə apə-saŋ ni.
 1SG TOP 昨日 チケット-ACC 買う-PTCP.PST COP.NMLZ.EGO
 「私は昨日チケットを買ったのだ。」
- c. bu gudə pio-nə apə-saŋ ni.
 1SG 昨日 チケット-ACC 買う-PTCP.PST COP.NMLZ.EGO
 「私は昨日チケットを買ったのだ。」

(55a)の疑問文に対する応答は(55b)と(55c)の二つの文が可能である。(55b)文の *ʂaŋhai-də*「上海に」が(55a)疑問詞 *halə*「どこ」に対応し焦点化されている。(55b)の *ʂi* の用いられる文の焦点になる要素は与位格形で現れている。(55c)は無標の語順である。

- (55) a. ta halə dzi-dzo?
 2PL どこ 行く-PRF.NEGO
 「君たちはどこに行ったか。」
- b. bədə ʂi ʂaŋhai-də dzi-saŋ no.
 1PL.EXCL TOP 上海-DATLOC 行く-PTCP.PST COP.NMLZ.NEGO
 「私たちは上海に行ったのだ。」
- c. bədə ʂaŋhai-də dzi-saŋ no.
 1PL.EXCL 上海-DATLOC 行く-PTCP.PST COP.NMLZ.NEGO
 「私たちは上海に行ったのだ。」

(56a)の疑問文に対する応答は(56b)と(56c)の二つの文が可能である。(56b)文の *bəidziŋ-sə*「北京から」が(56a)疑問詞 *halə-sə*「どこから」に対応し焦点化されている。(56b)の *ʂi* の用いられる文の焦点になる要素は奪格形で現れている。(56c)は無標の語順である。

- (56) a. ndzasi halə-sə rə-saŋ no? ((40a)の再掲)
 「彼らはどこから来たのか。」
- b. ndzasi ʂi bəidziŋ-sə rə-saŋ no. ((40b)の再掲)
 「彼らは北京から来たのだ。」
- c. ndzasi bəidziŋ-sə rə-saŋ no.
 3PL 北京-ABL 来る-PTCP.PST COP.NMLZ.NEGO

「彼らは北京から来たのだ。」

(57a)の疑問文に対する応答は(57b)と(57c)の二つの文が可能である。(57b)文の *ndzaŋ-galə* 「彼と」が(57a)疑問詞 *kaŋ-galə* 「誰と」に対応し焦点化されている。(57b)の *ʒi* の用いられる文の焦点になる要素は造-共同格形で現れている。(57c)は無標の語順である。

- (57) a. *tei kaŋ-galə bəidziŋ-də dzi-dzo?*
 2SG 誰-COM 北京-DATLOC 行く-PRF.NEGO
 「君は誰と北京に行ったのか。」
- b. *bu ʒi ndzaŋ-galə hamdələ bəidziŋ-də dzi-saŋ no.*
 1SG TOP 3SG-COM 一緒に 北京-DATLOC 行く-PTCP.PST COP.NMLZ.NEGO
 「私は彼と一緒に北京に行ったのだ。」
- c. *bu ndzaŋ-galə hamdələ bəidziŋ-də dzi-dzo.*
 1SG 3SG-COM 一緒に 北京-DATLOC 行く-PRF.NEGO
 「私は彼と一緒に北京に行った。」

以上の通り、*ʒi* の用いられる文と有標の語順の文において焦点となる要素の格について検討した結果として、*ʒi* の用いられる文では主格、属対格、与位格、奪格、造-共同格のすべてが焦点になることができると考えられる。これに対して、有標の語順の文において主格の要素のみが焦点化できると考えられる。

6.2.3 述語

本節では、*ʒi* の用いられる文と有標の語順の文の述語になる要素について考察する。

- (58) a. *nə gatei-nə kaŋ kal-saŋ ni?* ((36a)の再掲)
 「この話を誰が話したのか。」
- b. *nə gatei ʒi tei godzi kal-saŋ ni.* ((18)の再掲)
 「この話は君自身が話したのだ。」
- c. **nə gatei ʒi tei godzi kal-o/dzo.* ((24)の再掲)
 「この話は君自身が話した。」
- d. *nə gatei-nə tei godzi kal-saŋ ni.* ((47)の再掲)
 「この話を君自身が話したのだ。」
- e. *nə gatei-nə tei godzi kal-o/dzo.*
 この 話-ACC 2SG 自分 話す-IND.PST/PRF.NEGO
 「この話を君自身が話した。」

(58b)は、(58a)の疑問詞 *kaŋ* 「誰」に対応する *tei godzi* 「君自身」を焦点化する *ʒi* の用いられる文である。(58d/e)は、(58a)の疑問詞 *kaŋ* に対応する *tei godzi* が焦点になる有標の語順の文である。(58b)の *ʒi* の用いられる文の述語になる要素は、名詞句と考えられる *kal-saŋ ni* であるものの、(58c)の動詞句 *kal-o/dzo* は述語になることができない。(58d/e)の有標の語順の文の述語になる要素は、名詞句と考えられる(58d)の *kal-saŋ ni* でも、(58e)の動詞 *kal-o/dzo* で

も可能である。

以上により、有標の語順の文において名詞句（「動詞（形動詞形）+ni/no」）と動詞句が述語になることが可能である。一方、保安語の si の用いられる文の述語になる要素は名詞句（「動詞（形動詞形）+ni/no」）に限られるといえる。

7. 結論

以上、本稿では大塚保安語における si の統語的特徴と意味機能について考察した。

大塚保安語の si の統語的特徴は表 2 のようにまとめられる。統語的位置から、 si の前に現れる要素は、名詞句、動詞の形動詞形に限られる。 si が用いられる文の述語は、「名詞+i/o」、「形容詞+ni/no」と「動詞（形動詞形）+ni/no」の形になる。格の面から、 si は、名詞、動詞（形動詞形）の主格（ゼロ格）の名詞句のみに後続し、属対格、与位格、奪格、造-共同格の名詞句に後続しない。直接目的語が文頭に置かれる場合、 si が後続することはできるが、このとき属対格接尾辞をとることはできない。

表 2 大塚保安語の si の統語的特徴

			si の後			
			NP+ i/o	AdjP+ ni/no	VPTCP+ ni/no	VIND/IMP/OPTP
位置	si の前	NP	○	○	○	×
		AdjP	×	×	×	×
		VPTCP	○	○	○	×
格	si の前	主/ゼロ格	○	○	○	×
		属対格	×	×	×	×
		与位格	×	×	×	×
		奪格	×	×	×	×
		造-共同格	×	×	×	×

大塚保安語の si による情報構造と語順による情報構造の相違点は表 3 のようにまとめられる。 si が用いられる文において、 si の前の要素は文の主題であると考えられる。また si の前の要素は焦点になることはできず、焦点は文頭に置かれたいと考えられる。 si による情報構造と語順による情報構造の共通点として、焦点は文頭に置かれることができないと考えられる。相違点として、一点目は si が用いられる文の主題になる要素は主格（ゼロ格）のみが可能なのに対して、有標の語順の文において主題になる要素に格の制限がなく、主格、属対格、与位格、奪格と造-共同格の要素のすべてが可能である。二点目は si が用いられる文において主格、属対格、与位格、奪格、造-共同格の要素が焦点になることに対して、有標の語順では主格の要素のみが焦点化できる。三点目は si が用いられる文の述語になる要素は名詞句に限られることに対して、有標の語順の文においては名詞句と動詞句が述語になることが可能である。

表 3 大塚保安語の gi による情報構造と有標の語順による情報構造の相違点

	主題					焦点					述語	
	主/ゼ 口格	属対 格	与位 格	奪格	造-共 同格	主/ゼ 口格	属対 格	与位 格	奪格	造-共 同格	名詞 句	動詞 句
gi	○	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	×
語順	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	○	○

本研究が先行研究から新たに明らかにした点は大きく以下の三つにまとめられる。

まず、本研究では大塚保安語における gi を先行研究で言及されていない品詞や格等の統語的特徴から分析した結果、 gi の用いられる文の主語の格が主格形に限定されていることを明らかにした。

次に、 gi の用いられる文の情報構造についてより体系的な考察を行った。本稿の結論は先行研究において「保安語の大塚方言では gi は主題標識として借用されている」と指摘されているのと同様であるが、本研究では保安語の gi が用いられる文において焦点になる要素は gi の前に来ることができないということを示し、より明示的に gi の前の要素が文の主題であることを示した。

最後に、大塚保安語の gi が用いられる文と、本来存在すると考えられる有標の語順の文の情報構造の違いを統語的特徴から明らかにした。

大塚保安語における gi は漢語の「是」から借用したと考えられる。今後は、漢語の「是」との機能的対照、また漢語との言語接触により大塚保安語に生じた言語変化を明らかにしたい。先行研究から保安語の方言によって gi の使用が異なることが見られる。また先行研究における gi と著者のデータにおける gi にも世代差による違いがある。今後はこれらの資料を活用し、世代差と方言差を考慮しながら gi の意味機能を明らかにしたい。保安語と同じ漢語との接触環境にある東郷語、土族にも漢語からの借用要素 gi が見られる。それらの統語的特徴・意味機能の分析、及び保安語との対照研究を今後の課題としたい。

謝辞

本稿は、日本北方言語学会第4回大会（2021年11月7日、zoomによるオンライン開催）で発表させていただいた内容と修士論文（東京外国語大学）の内容を基に修正したものである。修士論文を指導してくださった児倉徳和先生、有益なコメントをくださった角道正佳先生と佐藤暢治先生、及び発表時にコメントをくださった先生方に感謝申し上げたい。貴重なコメントとご指摘をくださった査読者の先生方にお礼申し上げたい。そして、本研究の言語調査に協力してくださった馬瑞先生にお礼申し上げたい。

略号一覧

1：一人称 2：二人称 3：三人称 ABL：奪格(Ablative) ACC：対格(Accusative) ADJ：形容詞(Adjective) AUX：助動詞(Auxiliary verb) COM：共同格(Comitative) COND：条件(Conditional) COP：コピュラ(Copula) CVB：副動詞(Converb) DATLOC：与位格(Dative-Locative) DER：派生(Derivation) EGO：自己性(Egophoric) EXCL：除外形(Exclusive)

EXIST : 存在(Existential) GEN : 属格(Genitive) IMP : 命令法(Imperative) INCL : 包括形(Inclusive) IND : 直接法(Indicative) INS : 造格(Instrumental) INTER : 疑問詞(Interrogative) INTJ : 間投詞(Interjection) NEG : 否定(Negative) NEGO : 非自己性(Non-egophoric) NMLZ : 名詞化(Nominalizer) NPST : 非過去(Non-past) OPT : 希求法(Optative) PL : 複数(Plural) POSS : 所有(Possessive) PROG : 進行(Progressive) PRF : 完了(Perfect) PST : 過去(Past) PTCP : 分詞(Participle) SG : 単数(Singular) TOP : 主題(Topic) VBLZ : 動詞化(Verbalizer)

参考文献

- 布和・劉照雄 (1982) 『保安語簡志』北京：民族出版社。
- 陳乃雄 (1990) 「保安語的演變軌跡」『民族語文』3: 16–25.
- Erteschik-Shir, Nomi. (2007) *Information structure: The syntax-discourse interface*. Oxford: Oxford University Press.
- Fery, Caroline and Ishihara, Shinichiro. (2014) *The Oxford handbook of information structure*. Oxford: Oxford University Press.
- Krifka, Manfred. (2008) Basic notions of information structure. *Acta Linguistica Hungarica* 55: 243–276.
- Lambrecht, Knud. (1994) *Information structure and sentence form: Topics, focus, and the mental representations of discourse referents*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nakagawa, Natsuko. (2020) *Information structure in spoken Japanese: Particles, word order, and intonation*. Berlin: Language Science Press.
- Pustet, Regina. (2003) *COPULAS: Universals in the categorization of the lexicon*. Oxford: Oxford University Press.
- 佐藤暢治 (2000) 「保安語の変容と社会変化—問題点と今後の課題」『東アジア言語研究』4: 61–70.
- 佐藤暢治 (2011) 『保安語積石山方言のテキスト』東京：白帝社。

A Study of *gi* in Bonan from the Perspective of Information Structure

Arula

(Tokyo University of Foreign Studies)

Keywords: Bonan (Mongolic), descriptive linguistics, information structure

The study aims to discuss the Chinese loanword *gi* in Bonan, one of the Mongolic languages spoken in the Gansu Province of China. In this study, I describe the syntactic characteristics and semantic function of *gi* in Bonan in terms of information structure. Then I describe the difference between the information structure of the sentences containing *gi*, and that of the sentences which have marked word order, which has been used to indicate marked information structure in Bonan. The main claims of this study are summarized in the following two points. The first is, in the sentences containing *gi*, the element before *gi* is the topic of the sentence, and the element after *gi* is the focus of the sentence. The second is, compared with the sentences which have marked word order, the topic of sentences containing *gi* can only take the nominative case (zero case). The topic in the sentences with marked word order can take all cases.

(アルラ ruramongol@gmail.com)